

W-3 日琉祖語再建に向けての新たな展望：琉球諸語の視点から*

セリック・ケナン（国立国語研究所）

kelik@ninjal.ac.jp

ワークショップの構成

企画：セリック・ケナン

司会：青井隼人（ILOLi）

コメンテーター：平子達也（南山大学）

発表者（発表順）：松森晶子、中澤光平、五十嵐陽介、セリックケナン

1. 趣旨説明 セリック・ケナン（国立国語研究所）

2. 研究発表

発表1 松森晶子（日本女子大学文学部）

「日琉祖語の韻律体系再建に向けて—今後の課題—」

発表2 中澤光平（信州大学）

「琉球祖語における非狭母音 *e, *o の再建の再検討」

発表3 五十嵐陽介（国立国語研究所）

「2音節名詞第4/5類に対応する琉球祖語B類は改新であるとする仮説」

発表4 セリック・ケナン（国立国語研究所）

「(先)日琉祖語の語形成に関する試論」

3. コメンテーターによる評価

4. 全体討論

ワークショップの趣旨

日本本土で話される日本語諸方言と琉球列島で話される琉球諸語は同系統で、同じ祖語に遡ることは（国内に限定すれば）19世紀末以降よく知られている（田代1888、1894、Chamberlain 1895）。この祖語は「日琉祖語」（proto-Japonic または proto-Ryukyuan-Japanese、本ワークショップでは pJ）と呼ばれてきた。日琉祖語はそれを知る文献が存在しないことから、もっぱら歴史比較言語学的手法によって再建されるが、この再建作業が日本列島で話される言語の歴史を知る上では重要な研究課題である。

日琉祖語を再建するに当たっては、本来それに遡る言語を全て参照することが理想であるが、これまでの研究では日本語、とりわけ文献の日本語への偏りが目立つ。例えば、文献日本語以前の言語体系の再建を目指してきた Whitman や Frellesvig の一連の研究（Whitman 1985、2008、Frellesvig & Whitman 2008 等々）は多くの成果をあげているが、琉球諸語のデータを殆ど参照していない。これに対して、琉球諸語のデータを取り入れた研究として、服部（1978-79）、Martin（1987）、ペラール（Pellard 2013、Pellard to appear）等が挙げられる（また琉球祖語の再建に的を絞った Thorpe（1983）も特筆に値する）。これらの研究を通じて、日琉祖語を再建するためには琉球諸語の視点が欠かせないことが示されたが、これらの研究は大きな制約のもとに成されてきた。すなわち、最新の研究までも含め、琉球諸語に関するデータ（文法、語彙、アクセント等）が限られていた状況が続いていた。しかし、現在はこの状況が全く変わりつつある。

* 本ワークショップは国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「日本・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」（代表：五十嵐陽介）、JSPS 科研費 19K13174、21H00353（代表：セリック・ケナン）の助成を受けている。

国内における記述言語学の近年の活発化により、とりわけ琉球諸語に関するデータが目覚ましいペースで蓄積されつつある。中でも、琉球の各方言の辞典や語彙集が毎年数冊のペースで新たに公刊される状態が続いており（例えば八重山語鳩間：加治工（2020）、宮古語多良間：渡久山・セリック（2020）等）、通時的な考察の基礎となる語彙データが急速に増えている。このような新しいデータを取り入れることによって、琉球祖語や日琉祖語をこれまでにない精度で再建することが大いに期待できる。つまり、まさに今こそが従来の説の妥当性を緻密に検討し、新たな仮説を提示できる好機であると言える。

以上を踏まえて、本ワークショップでは、近年データの増加が著しい琉球の視点から日琉祖語の再建に向けての新たな可能性を探る。まず、発表1では琉球祖語に再建されるアクセント体系の最新の仮説を提示しながら、日琉祖語の韻律体系の再建に関する課題について述べる。続いて、発表2では日琉祖語で非狭母音の *e と *o を再建する根拠となる琉球祖語と上代日本語との対応 *e :: i₁、*o :: u（服部1978-79、Pellard 2013）を再検討し、その対応が必ずしも妥当でないことを指摘する。次に、発表3では、語形成という新しい観点を取り入れて、琉球と日本語で見られる2拍名詞のアクセント類の対応 B :: 4、B :: 5、C :: 4、C :: 5 が日琉祖語に遡るものではなく、琉球祖語に起きた二次的な変化の結果であるという仮説を提示する。最後に、発表4では日琉祖語の語形成を対象とし、琉球のデータを活用しながら日琉祖語に再建される2拍以上の語はその多くが通時的に単純語ではなく、複数の形態素に分解できる複合語や派生語であるとする仮説を提示する。その上で、語形成と声調体系の成立との関連性について指摘し、この発表で提示する仮説が持つ意義について述べる。

参考文献

- Whitman, John (1985). *The phonological basis for the comparison of Japanese and Korean*. Ph.D. thesis, Harvard University.
- Whitman, John (2008). The source of bigrade conjugation and stem shape in pre-Old Japanese. In: Frellesvig, Bjarke & Whitman, John (eds) *Proto-Japanese: Issues and Prospects*. John Benjamins. pp.159–174.
- 加治工真市（2020）『鳩間方言辞典』立川：国立国語研究所言語変異研究領域。
- Thorpe, Maner L. (1983). *Ryūkyūan language history*. Los Angeles: University of Southern California. Doctoral dissertation.
- 田代安定（1888）『海南諸島調査書』未刊行原稿（東京大学所蔵）。
- 田代安定（1894）「八重山群島住民ノ言語及ヒ崇教」『東京人類學會雜誌』9（96）:229–232。
- Chamberlain, Basil Hall (1895). *Essay in aid of a grammar and dictionary of the Luchuan language* (Transactions of the Asiatic Society of Japan 23, supplement). Yokohama: Kelly & Walsh.
- 渡久山春英・セリック・ケナン（2020）『南琉球宮古語多良間方言辞典』立川：国立国語研究所言語変異研究領域。
- Martin, Samuel E. 1987. *The Japanese language through time*. New Haven: Yale University Press.
- 服部四郎（1978–79）「日本祖語について」『言語』7（1）–8（12）。東京：大修館書店。
- Frellesvig, Bjarke & Whitman, John (2008). Evidence for seven vowels in proto-Japanese. In: Frellesvig, Bjarke & Whitman, John (eds) *Proto-Japanese: Issues and Prospects*. John Benjamins. pp.15–42.
- Pellard, Thomas (2013). Ryukyuan perspectives on the proto-Japonic vowel system. In: Frellesvig, Bjarke, Sells, Peter (eds.) *Japanese/Korean Linguistics 20*. pp.81–96.
- Pellard, Thomas (To appear). Ryukyuan and the reconstruction of proto-Japanese-Ryukyuan. In: Frellesvig, Bjarke & Kinsui, Satoshi & Whitman, John, *Handbook of Japanese historical linguistics*, De Gruyter Mouton.